



FIFAワールドカップ

2022カタール大会

加藤 良一

令和4年(2022)2月7日

FIFAワールドカップ2022カタール大会・アジア最終予選(3次予選)、〈日本vs.サウジアラビア〉は2-0で日本が勝利し、首位サウジに次ぐ2位に上がった。アジア最終予選は12か国がA、Bの2グループに分かれて戦い、各グループの上位2ヶ国がワールドカップ（W杯）出場権を獲得できる。男子の場合、アジアからの出場枠は4.5である。

4.5とは、どういうことかという、出場国を増やす方針の中で生まれた策。やはりサッカー後進国の多い地域の出場枠を一気に増やすことはできないので、他の大陸との間で1枠を共有し、プレーオフとして出場決定戦を行う。したがって、この1枠はどちらかの大陸が獲得することになる。

アジアでは、A・B各グループの3位がプレーオフ出場権を得、勝者は大陸間プレーオフで南米予選5位と対戦し、勝てばW杯大会への出場権を獲得できる。カタール大会は、2022年11月21日～12月18日に行われる。

カタール大会までは32チームだが、2026年開催の**アメリカ・カナダ・メキシコ3か国共催**の大会からは一挙に**48チーム**に増やされる。内訳は、アジアが「4.5→8」、ヨーロッパ「13→16」、アフリカ「5→9」、北中米カリブ海「3.5→6」、南米「4.5→6」、オセアニア「0.5→1」、プレーオフ「2」となる予定で、規模がますます拡大してゆく。その分だけ多くのゲームを楽しめるので嬉しい話だが、開催国はすべての面で大変な負担になるのは必至である。1国単独での開催はいよいよ難しくなっていくだろう。

アウェイゲームをテレビで観られない悩み

ダウン

今年のW杯、日本代表のホームゲームはDAZNと地上波が並列して中継・配信予定だが、海外におけるアウェイゲームはDAZNの独占契約により地上波での放映がない。DAZNを契約すればよいのだが、それも気が進まずまだ観戦できない状態が続いている。しかし、DAZNはAFC（アジアサッカー連盟 Asian Football Confederation）と2028年までの長期放映権契約を締結しており、2023年のアジアカップやアンダー世代の各種大会なども配信する予定だから、そろそろ諦めて契約するしかないのだろうか。

日本のサッカー発祥の地は築地

話は変わって、日本で初めてサッカーが行われたのは、明治6年(1873)**築地**でのことだった。当時の東京は、そ

抜擢した。大会前のスイス合宿には25名を帯同し、その中から最終的に本戦登録メンバー22名を選ぶという方法を採用した。その結果、開幕8日前の6月2日、岡田監督は、市川大祐、三浦知良(カズ)、北澤豪の3名を登録メンバーから外すと発表した。三浦と北澤はチームに帯同せず、会見の前にキャンプを去り帰国してしまった。日本代表を支えてきたこの二人の落選は筆者にとっても大きなショックだったし、残ったメンバーにも少なからず動揺を与えたようだった。昭和42年(1967)生まれのカズはいまだに現役を張っている。驚異的だが、W杯に出られなかったことが影響してはいないだろうか。

フランス大会の登録選手全員がJリーグの国内クラブ所属、平均年齢25.3歳だった。今では、国内組を探すほうが大変なほどで、その発展ぶりには隔世の感がある。

大会直前、家内とフランスを旅行“Do you have the soccer stamp?”

フランス大会の直前の3月、家内と共にフランスを旅行した。パリ市内を散策していると、たまたま郵便局を見かけたので、記念切手でも買おうかと立ち寄ってみた。ところが、英語で「サッカーの切手はありますか?」と言ってもなかなか通じなかった。もっとも発音がおかしかった可能性も十分考えられるが…。そこで、「フットボール」と言い換えたらなんとか通じたものの、肝心の切手は売り切れていた。ところが帰国後に通販で手に入ることがわかり、早速取り寄せた。📮



日本代表、意気揚々とフランスへ

閑話休題。初出場日本の基本システムは「3-4-1-2」。正ゴールキーパー(GK)は川口能活。ディフェンダー(DF)は秋田豊・中西永輔の2ストッパーとスーパースターの井原正巳。両ウイングバック(WB)は左が相馬直樹、右が名良橋晃。2ボランチの名波浩・山口素弘と司令塔の中田英寿がゲームを組み立て、フォワード(FW)は中山雅史と城彰二の2トップという布陣だった。

サッカーの布陣は、攻撃方向の後方からGKをのぞいて表現する。「3-4-1-2」はドイスボランチ型と呼ばれ、中盤の構成が守備的MF2人、両サイドMF2人、攻撃的MF1人で、最も一般的でバランスに優れるといわれている。守備的MFが2人いることでDFラインの前やWBが上がったときのサイドのカバーが容易で、守備が安定する。攻撃においては攻撃的MFが非常に重要な役割を担うが、WBのオーバーラップや2人の守備的MFのうち1人

が前線に上がって攻撃に参加して攻撃的MFをサポートする。1990年代後半のイタリアやトルシエ、ジーコ時代の日本代表などはこの布陣が多かった。

日本初出場のW杯観戦に、筆者は息子を伴って6月フランスを訪れた。チケットの入手はとてつもなく困難で、よくゲットできたものだと思ふ。実は通常の販売ルートではまったく買えず、たまたま大会スポンサーのビールメーカー・バドワイザーの懸賞で第3戦ジャマイカ戦の無料招待が運よく1枚だけ当たった。おまけに同伴者は旅費の半額で招待するというので、これは二度とないことだと息子を連れ添っての参戦となった。本当は家内も行きたかったのだが、そこは息子へ譲って送り出した。

日本代表、捕らぬ狸の皮算用、3戦全敗・1得点のみ…

本大会では、アルゼンチン、クロアチア、ジャマイカのグループHに入った。2度の優勝経験を持つアルゼンチン以外の3カ国は初出場という極めて珍しいグループだった。岡田は1勝1敗1分け（勝ち点4）での決勝トーナメント進出を目標に挙げた。国内の声もほとんどがそれに同調していた…

初戦アルゼンチン戦は、前半28分ゴール前のこぼれ球をFWバティストウータに決められ失点。後半は何度か攻め上がりチャンスはあったが得点できず、0-1で敗れた。第2戦クロアチア戦は酷暑の中での持久戦。引き気味のクロアチアに対して主導権を握り、前半34分に中田のクロスからゴン中山が最大の決定機を迎えたが、GKに阻まれてしまった。逆に後半32分にカウンターからFWシュケルのゴールを許してしまい、2連敗で決勝トーナメント進出の望みが絶たれた。

食の町リヨンで行われた第3戦ジャマイカ戦はともに2連敗同士がぶつかり合う形となった。どちらもW杯初勝利を賭けた試合となった。日本は攻勢に試合を進めたが、隙を突かれてMFウィットモアに2ゴールも奪われてしまった。敗戦の気配が漂う中、後半29分に呂比須のヘディングの折り返しを中山が合わせて日本のW杯初ゴールを記録した。その後、18歳とチーム最年少の小野が交代出場して才能の片鱗を見せたが、3試合連続で1点差を追いつけず、3戦全敗という結果で初のW杯を終えた。

目の前で日本代表の敗戦は予想外であったが、冷静に考えれば当然の帰結だったのかもしれない。勝ち切ることの難しさを思い知ったフランス大会であった。あれから24年、今ではメンバーの大半が海外で活躍している。この躍進はJリーグの成功が大きく貢献していることはまちがいない。



「SPORTS」Top^



「Home Page」^